慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会学会の目的と活動について
Sub Title	James Bryce, introductory address
Author	Byice, James(Yamada, Kenji) 山田, 賢司
Publisher	三田哲學會
Publication year	2005
Jtitle	哲學 No.114 (2005. 3) ,p.174- 180
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集都市・公共・身体の歴史社会学-都市社会学誕生100年記念- A編 ゲデス・プロジェクト 第III部 ロンドン社会学会の創立
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000114-0178

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

James BRYCE, 1905, "Introductory Address,"
Sociological Papers 1904 (1905): xv–xviii.

1904年4月18日，スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカル・サイエンス（ロンドン大学）で開催された学会で配布された．

社会学会の目的と活動について

ジェイムズ・ブライス卿
(THE RT. HON. JAMES BRYCE)

社会学会の目的，および学会において期待される活動に関して，若干の説明をしておきたい．研究と調査の多系的な派生を促すために，既に数多くのアソシエーションがある．そこにさらに付け加えられる学会や組織は，その存立を正当化する必要がある．既に数多くの学会が存在するため，新たな学会等の設立は，何らかの決定的な理由がない限りはもう必要ないと言われるかもしれない．古代社会において，新たな法 (law) を作るために進言する際には，自分で絞首用の紐を首に巻いた上で進言しなければならないという掟があった．なぜなら，そこには非常に多くの，おそらくは過剰な数の法 (law) があって，既に強制力を持っているからである．そうしたことを踏まえると，既に膨大な数の組織が存在しているところに，また新たな学会を加えるのを正当化しようとする人は，自分自身に無茶な要求をする人ではないかと思われるかもしれない．周知のとおり，所属しているの学会組織のすべての会合へ出席しようとするならば，研究者の日常の大部分は，研究活動ではなく，会合への出席により占められるだろう．しかしながら，私は社会学会の設立を正当化することは困難ではないと確信している．

私は社会学の定義を試みるつもりはない．ましてや，社会についての全

ての領域を記述しようなどとは思わない．むしろ，私は思い切って次のことを示唆したい．それは，調査の成果をさまざまな効用へと工夫して導いていくために存在する機関，言うなれば，人間社会を特徴づけるさまざまな活動の諸機能，諸領域に対して，何か新たなものを付け加えられる新しい学会が，必要とされる若干の理由についての示唆である．科学的研究の見地から考えて，社会で生活する動物としての人間は，際限のないほど数多くの側面から自己を表現しているため，われわれは未だ，これらすべての側面を抽出し尽くしてはいない．たとえ，研究者たちが社会研究にふさわしい部門のリストを作成することができたとしても，われわれは何年も経たないうちに，また新たな部門が現れてくるのを確認することになるだろう．従来の研究者が研究を行う際に考えていたのとは異なる調査研究の方法が，各々の研究対象に沿ったやり方で研究を進める必要が出てくるのに従って現れてくる．このように，常に社会調査の分野が広がり続けているということが，社会学会が必要とされる第一の理由である．私の知る限り，人間が活動するすべての領域に科学の目を向けて調査を行う学会や団体は，これまでのところ存在していない．したがって，人間に関する知識のなかで新たな領域が立ち上がった際に，その領域の開拓者がもし自分たち独自の組織を形成するだけの威信や力強さを持っているならば，その新しい科学が萌芽的な段階から成熟された段階になってまとまりがでてくるまでの間，それを育成するための包括的な学会が存在するべきなのである．

社会学会において取り扱うことが要請されるであろう，新たな社会研究の部門が数多く現れ始めている．この学会が開催される際に報告された，学会最初の論文集に関する計画の中から，話題を一つ取り上げることにする．その話題とは，最も創造的かつ活発な研究者の一人であるフランシス・ゴルトンによって提唱された「優生学」――これは，最も優れた人間の類型が形成されるかどうかを左右する法則を明らかにする科学，という

ことを意味している――についてである．それは遺伝に関する素晴らしい研究の課題である．まず，それは人間に関係する研究課題のなかで，まだほとんど手がつけられていない．そして，その課題に関する専門的な学会は，私の知る限り未だ存在しておらず，それゆえまだまだ計り知れない可能性をもった研究課題である．私は以前に，異なる人種間の関係を調査する仕事に従事していたことがある．そこでの目的は，異なる人種間の結婚がどのような結果をもたらしているのか，そして異なる人種の男女間で生まれた混血の子どもについて，よく支持されるようにどちらか一方の親よりも劣性の混血児になるのか，あるいはより優秀な人種を生みだす傾向にあるのか，実際のところどのような結果になっているのかを調査することであった．私はこの課題に関して入手できるデータが非常に限られていることに気づいた．また，この分野に関して体系的に書かれた論文を全く発見することもできなかった――それでも，思い当たる研究課題に関してどのような文献でもあると思われるドイツならば，あるのかもしれないが．そのような文献は私が探した限りイギリスでは全く存在しない．そして明らかに，フランスやイタリアにおいても，きちんとした形でそのような課題に取り組んだ研究はない．いずれの国々においても，そのような研究課題に特化して取り組んでいる学会はない．人類学者は学会を構えているが，彼らはその特定の領域に関する調査研究に対してはあまり探求していない．それゆえ，さまざまな人種間の関係にまつわる遺伝についての学説のような，身近な項目でさえ，なされるべき研究課題が未だ多く残されているのである．

社会学会が設立されるべきもう一つの前提は，数多くの調査研究の部門が，いわゆる社会科学の専門領域として研究され発展してきたものの，その反面，各部門がお互いの共通の利益を得るために存在するべき密接な関係がないことである．各々並行して活動している学会や協会は数多くあるが，それらの間で相互的な交流は進展していない．しかしながら，同種の

分野を互いに有益な関係性のなかに位置づけることほど容易なことはないであろう．人間にまつわるあらゆる現象を探求する各学会は，枝分かれしていて形式的には関係がないように見えるものの，実際には互いに関係しあっているすべての領域を，体系的な協働関係にしていくことができるものと思われる．なお，さまざまな専門領域の協働関係がこれまで不十分であった原因とそのことがもたらした影響として，各研究者自身がお互い外部からあまりにも隔離された世界に安住していたことがあげられる点は，記憶にとどめておかなければならない．異なる集団に属する専門家がより緊密に会合し，研究の内容を比較しあうことができたならば，手堅い研究成果や研究のために必要な支援がもたらされていたであろう．しかし，精神科学 (mental sciences) と道徳科学 (moral sciences) の各部門の専門家たちが前述の形で融合するための準備は，今のところできていない．社会学会における期待と目的は，異なる領域で社会調査に従事する人たちに，互いに有益で支援し合う関係をもたらすことである．そして，ある一つの学会が，全てかあるいは多くの人間についての研究領域に対する包括的な関心から，他のより専門的に特化した学会と，お互いに情報交換する場を設けることができるように仕向けたならば，人間に関するあらゆる形の知識が，相互関係を持ったり統合したりする方向に向かって，より急速に進歩するであろう．

この国においてわれわれは，体系的な分析についての理論面での発展を，人間の発展に結びついた科学へと導くことに対する期待に，あまり応えていないということも付言しておきたい．この点に関して顕著な例外をなしているのは政治経済学である．この部門においては，おそらく全体的に，われわれの国ほどめざましい発展を遂げているところはない．この部門の研究課題に精彩を与えた人々の名声のすごさを知れば，経済科学の進歩のためにイギリスの思想家や文筆家が行ってきたことを誇りに思うことができるだろう．しかし，社会研究の多くの分野においては，理論的な部

分に関して，彼らが成し遂げてきたほどの業績はない．またアダム・スミスの時代から，実践的な面に関して，イギリスでは多くの活動が行われているという事実がある．一般的に言って，イギリスには，実践的な活動をする人たち——その人たちは，精力的で，進取の気性に富み，辛抱強い人たちである——が数多く存在したし，現在でも存在している．彼らは，人々に利益をもたらす社会的事業に対して，あらゆる分野で精力的に活動しており，特にわれわれが慈善事業と呼んでいるものの分野での活躍が著しい．われわれは，救貧法，慈善事業，公衆衛生，そして病院に関連する事項，すなわち寄付金の適正な活用法ないしはその他多くのその種類の問題に対して，実質的な進歩をもたらすために多くのことを行ってきた．しかし，それらの問題に対するわれわれの理論的な考察 (treatment) は，実践的な活動に対して遅れをとってしまっている．イギリスには，数多くの社会的活動のための部署が存在するが，その活動は専ら科学的知識ではなく経験的な基準に則って行われる．しかもそこでは，科学的知識の入手が可能な場合であっても，経験的な基準が適用されるのである．しかしながら，もし科学的知識が十分に体系化されていて，アクセスしやすい状況になっていれば，おそらく，その知識をそこで生かすことが可能となる．ここにいる皆さんには，理論家の力を借りて実践家が大きな利益を得るということは，強調するまでもなく自明のことと思われる．

社会学会の設立を正当化するもう一つの理由は，われわれの関心が直接的，実践的な対象に向かったときにはっきりするだろう．そうした取り組みは，われわれが所属する大学やその他の教育機関よりも，社会調査のあらゆる分野についての理論を教えるのにあたって，よりよいものを提示できるばかりでなく，実際に提供することさえ可能なのである．われわれは，この種の分野に取り組むための大学教授や講師の職が著しく不足しているという問題を抱えている．イギリスの大学は社会科学に関する教育や研究を提供するという点で著しく後れをとっているのではないかと思う人

たちは，ドイツの『ミネルヴァ』と呼ばれる年報に掲載されている研究を一瞥すると，その思いが確信へと変わることだろう．さまざまな国の社会科学の教員によって寄稿されたそのリストを見ると，ヨーロッパ大陸やアメリカの最も優秀な大学は，イギリスのものよりも明らかに優秀であることがわかるだろう．もちろん，この国の大学は相対的に貧弱ではあるものの国家の方は豊かなので，貧弱であることを理由に必要な手段の行使を怠ってはならない．

社会科学に関するより良質な文献の確保も，この学会が自らのために行うべきもう一つの目的であることも付け加えておきたい．イギリスでは，社会学的研究に関して十分な所蔵のある図書館がわずかしかない．我々が会合を行っているスクール・オブ・エコノミー・アンド・ポリティカルサイエンス〔ロンドン大学〕の図書館は，社会科学に関して，とりわけ経済学と政治学という二つの学問における研究の向上を目的に構成されている．しかし，社会科学に関する研究は多岐にわたる．このことはすなわち，ロンドンにおいてもその他の地域においても，より行われるべきことがたくさん残っているということを表している．例えば，私はこの国において，またこの国の図書館において，社会学の研究者が，自分たちの学問分野に関する国外の主導的な論文集のファイルを，きちんと網羅的に見つけることさえできないと言われたことがある．この学会は，公立の図書館における社会学の領域に関する文献の所蔵を，より充実したものにするよう働きかけるという，有意義な目標を持つことになるだろう．社会学教育の拡充を提唱し，文献資料の多様化と体系化を促すということは，社会学会が有効なプロパガンダ活動を行うための，数ある方法のうちの一部である．

最後に，最も広い意味において，学会設立の目的とされるものについて言及しておきたい．大きな変動――有史上最も大きな変動だと思われる――が，ここ150年ほどの間に世界中で起こっているというのが共通認識になりつつあるが，その変動は自然科学の進歩より生じた物質的な発展

によるものだけでなく，これらの科学が人間の精神やその他諸々の分野の研究に影響を与えたことによるものでもある．科学の核となる考え方（すなわち，確実で有意な関連性を示す形で，事実や順番の整理をすること）は，何世紀にもわたって存在する考え方ではあるが，しかし今，科学は人間の精神の発達に関して重要な段階を示すような形で，非常に影響力を強め，広く普遍的に行き渡ってきている．科学的思考は自然科学の領域に大いに影響を与えてきたが，人間科学の領域には未だ影響を与えていない．歴史学から倫理学に至るまですべての人間科学は，本来は科学的思考に該当するはずのものであるが，〔実際には〕科学的思考の範疇に入ってきていない．それゆえ，社会学会は自らの課題として，まず優先的に，すべての人間に関する研究の領域に科学的思考を浸透させるための努力をしていかねばならない．

学会が成し得る成功というのは，もちろんそこに参加する人々の数と資質に依存している．もし，この学会が社会調査においていくつかの主流な領域で活躍している主導的な研究者を取り込み，彼らが一堂に会して各々が学会からの支援による恩恵にあずかることができるようにしたならば，そして，学会に参加する人たちが根気強くそして着実にその目標——大会に参加すること，お互いに新たな観点から他の学会員の研究に刺激を与えること——を達成するための準備に取りかかったならば，永続的で不変の価値をもたらす結果になることが期待できる．そうであるならば，われわれは次のことを正しく認識することになるだろう．それは，そうした研究課題をより十分に科学の領域に取り入れる必要性——より具体的には，その研究課題に取り組む人々の間で，相応の相互関係や協力関係を確立する必要性，さらには実践に応えられるだけの理論を発展させる必要性である——が，この学会の設立を必要とされる，現代の差し迫った要請につながるということである．

（山田　賢司訳）